六角堂参籠

六角堂

親鸞は比叡山で修行を重ねる中で自己の煩悩の深さを知るばかりで、求める境地に達することはできないことに悩み苦しみます。そして29歳の時、六角堂への百日参籠を決心します。親鸞は仏法を尊び、その教えを人々に広めた聖徳太子を強く慕っていました。だからこそ、修行に行き詰まったこの時、聖徳太子ゆかりの六角堂に参籠することで、自らの未来を切り開こうとしたのでしょう。そして、参籠を続けた95日目、救世観音より、

> もし仏道を修行するあなたが、どうしても女性を傷つけずにはいられない身であるならば、私はその女性になりかわりましょう。一生添い遂げ、臨終には極楽へと導きましょう。

というお告げを受けたといわれています。このお告げを受けて親鸞は自らも極楽浄土に生まれ得ると確信しました。この夢告で自らの進むべき道を得た親鸞は、東山吉水の地で念仏の教えを説いていた法然のもとへと向かったのです。現在、六角堂右手に親鸞像が立っています。

聖徳太子

【六角堂】

六角堂には創建にまつわるおもしろい逸話が伝えられています。四天王寺（大阪市天王寺区）造営のための木材を求めて当地を訪ねた聖徳太子は、ある日、清らかな池で沐浴をしました。

その時に携えていた如意輪観音を池のほとりの木に掛けて沐浴しましたが、いざ帰ろうとすると仏像がその場から動きません。その夜、聖徳太子は「これからはこの地で苦しむ人びとを救いたい」と仏さまがお告げする夢を見て、当地にお堂を建立することになったと伝えられています。

【六角形の本堂】

展望エレベーターからは、六角堂の由来となる六角形の本堂が一望できます。

【聖徳太子を祀る太子堂と沐浴の池跡】

池のほとりの建物が太子堂。聖徳太子自作と伝えられる南無仏の像（聖徳太子2歳の像）が安置されています。

【六角柳】

本堂前に植えられている、六角堂発祥の柳の木は、植物学名「ロッカクヤナギ」と呼ばれています。

嵯峨天皇が夢告で絶世の美女と出会い結ばれたという逸話も。

【へそ石】

平安京造営時、お堂の位置が道にあたることから勅使が祈願したところ、お堂が北へと動いたと伝わります。跡に残った石は「へそ石」と呼ばれています。町の中心にあることから「へそ石」と呼ばれてきました。

【池坊】

池のほとりの坊舎は「池坊」と呼ばれ、池坊の僧は仏さまに花を供えてきました。これが後に理論化され、生け花へと発展しました。

写真は、生け花発祥の地・六角堂の境内に立つモニュメント。